

ワクワク留学体験記

MIT Media Lab

嵯峨 智 (筑波大学)



Future of Imaging での集合写真

1. はじめに

前職東北大学にて組織的若手海外派遣の一貫として、短期ながら留学の機会を与えてもらえるとの話を聞き、私は MIT Media Lab の Ramesh 先生を筆頭候補に挙げさせていただきました。彼は、Bokode や Tensor Display, Bidi Screen など特殊な光学系を利用したアプリケーションに関する数多くの興味深い研究に取り組んでおられ、SIGGRAPH にも多くの論文を通しています。ぜひ Ramesh 先生の専門分野の知識や創意のあり方を学び、新たな研究への足がかりを得たいと考えた次第です。先生とは一切面識がありませんでしたが、珠玉の研究成果の数々はもちろん知っていましたし、研究に対する創意や後進の育成において、目をみはるものがあることを知り合いの先生方から伺っていたこともあり、つてをたどって無理にお願いしました。そして MIT と Media Lab をこの肌で感じることで自分自身を変容させる契機になればと考えた次第です。

2. 多様性の宝庫

渡航準備ではこれまでの記事同様、いろいろあわただしく書類を用意し、なんとかボストンでの生活をスタートしました。そして到着早々から、こちらの食生活を大いに楽しむことができました。週末には原色で彩られた甘すぎる様々なカップケーキ屋さんなどを巡り、近隣にある Whole Foods, Shaw's といった巨大スーパーでは日本では見たこともないような巨大な野菜、色とりどりのチーズ、ナッツなどの食材を入手しました。研究としての留学に関係ないじゃんと思われるかもしれませんが、実はこの商品の多様性には大変感銘を受けました。私自身、研究の契機となるものは、ちょっと変わったものを目にしたときや触れたときだったりするのですが、日本

ではそんな刺激が欲しくて東急ハンズなどに通ったこともありました。ここではそれと同じ感動が普通の食材店でも得られるのです。実はこの多様性のおかげで私の研究もたいへんはかどりました。触覚ディスプレイの研究遂行に不可欠な様々なテクスチャをこれら食品店や、工作資材を大量に扱う Home Depot などのお店にあるフリーサンプルなどを駆使して容易に手に入れることができましたし、研究の契機となるようなものについても見つけることができました。このようにスーパーひとつとってもこの国の底力を感じ、こんなに身近に多様なものを体験して研究への刺激を受けられる機会を実感し、研究の触角を幅広く振らせてもらいました。

3. MIT も Media Lab も楽しすぎる

もちろん多様な刺激だけがあれば研究が進むわけではありません。それを受けとる能力を養うことも重要です。そんな素養を育ててくれるかもしれないサービスが MIT にはそろっていました。MIT では MIT ID という ID カードがあれば様々なサービスを受けられます。MIT の図書館ではコピー機で複写した資料がそのままメールで送信可能ですし、Boston Dynamics の原点である Leg Lab の脚ロボットなど MIT の歴代の研究を常設展示している博物館はもちろん無料で見学可能です。さらには世界屈指の美術館である Museum of Fine Arts (MFA) など様々な校外施設をも無料で利用可能です。学生に様々な視座をもたせる環境が街をあげて創られていることに羨望しきりです。私もこれを利用して MFA には一度ならず足をはこび、ガラス越しではない光線で、ルノワールなど世界の名画を目に焼き付けました。

また、Media Lab ではより強力に考える力を養ってくれます。というのも、研究室内、研究室間の議論が非常

に盛んで、それを高度に機能させるための仕組みや工夫が組織側から用意されているからです。例えば研究所全体の交流の場としてのフリーランチやティーブレイクが定期的で開催されていました。多くは研究所内のオープンスペースで実施されるのですが、一度は天気の良い日に芝生のある広場でケータリングの中東料理を皆で食べながら研究室内外の人と自らの研究について議論し、その他の研究を知る機会を得て、交流することもできました。これらの環境はスポンサーなどからの潤沢な予算のある Media Lab ならではのようですが、こういった場があることで、研究を進める上で不足する知見や技術を、他の研究室の人的リソースで補うということも大変実現しやすい環境でした。当然、Ramesh 先生のところにも、他の研究室の人が多数出入りしておりました。集合知が研究の基底として理解され、実践されている証左です。こういった文化は是非日本の大学でも取り入れてもらいたいところです。

その他、Media Lab ではほぼ毎週のように入れ替わり立ち替わり様々な講演が実施されています。それらのほとんどは一般の方も参加可能ですし、webcast をしているものもあります。Howard Rheingold の講演では“Don't just consume- Create!”という言葉聞いたとき、自分の目指すものが間違っていないことを確認できました。また、Society of Display Information という学会がボストンで開催される折には、研究員が自らコンタクトをとり、学会目当てでいらっしやっていた Ken Perlin に Media Lab で講演をいただいたこともありました。このように、先生だけではなく研究員の積極的な働きかけによるものも含め、普段聞けない方々の講演が目白押しでした。



Media Lab. Sponsor Week における講演会の様子

4. Ramesh 先生のもと、研究について考えた

先にも書いたとおり Ramesh 先生の研究室をはじめとする Media Lab 内での推進力となっているのは議論であり、それが発想具現の源となっています。例えば、

Ramesh 先生の“Future of Imaging”という、学生から社会人まで聴講可能な講義では、毎週コンピュータビジョンに関する最新トピックの紹介や、関連分野の専門家を招いての講演が開催され、これらの講師に対しても鋭い質疑が行われました。このように様々な研究背景を持つ人とも、議論をする機会を得られます。そして参加者は独自の考えを練りあげていきます。講義の最終段階では各自が考える5年後、10年後のイメージングテクノロジーについて発表することが求められ、それらの中から面白いアイデアがあれば、さらに Media Lab 内で研究に昇華させることも試みられていました。これらの研究提案の場ではことあるごとに Ramesh 先生から Feasibility (実現可能性) の重要性を指摘されます。そのため常に研究の意義を考えることへの意識づけも、自然と鍛えられます。

Ramesh 先生の指導、後進育成の姿勢にも感銘を受けました。Ramesh 先生ご自身は東奔西走の日々を送られていますが、研究員各自の研究にも目を配り、時間のあるときは「問題はないか、議論する必要はあるか」と声をかけ、的確なコメントをいただけます。そして国際会議に参加する学生や研究員には「私が他の先生と話しているのを見かけたら、積極的に声を掛けてきなさい」と指示します。これは学生、研究員全員に自分の将来の進路を考えさせ、他の先生に対する自己アピールの場をつくり、コネクションをつくる契機を与えているのです。新しい道を拓くチャンスを後進に与えることも怠らない、こうした指導者としての姿勢のすばらしさをひしひし感じました。

5. おわりに

3ヶ月間という短期ながら貴重な体験はこれまで自分が形成してきた研究者としての価値観を、いい意味で壊してくれました。価値観が完成していない学生の頃に来ていたらここまで鮮烈な衝撃はうけなかったかもしれません。ここで経験したことを咀嚼しつつ、今後の自分の研究生活に変革をもたらす材料として行きたいと思います。

【著者略歴】

嵯峨 智 (サガ サトシ)

筑波大学システム情報系情報工学域准教授。力覚、触覚センサやディスプレイを中心としたヒューマンインタフェース、VR 技術に関する研究に従事。博士 (情報理工学)。